



ナチの
プロパガンダと
アラブ世界

Nazi Propaganda for the Arab World

JEFFREY HERF

ジェフリー・ハーフ

著

星乃治彦・白杵 陽・熊野直樹・北村 厚・今井宏昌

訳

ナチスは第2次大戦中、中近東に対し大規模なプロパガンダを展開した。当時英仏からの独立を目指していたアラブ世界にとって、ナチのプロパガンダは抵抗のツールとみなされた。そして、その反ユダヤ主義はアラブ知識人の中に潜行していく。新たに発見された資料を加え、中近東におけるナチのプロパガンダの全貌を明らかにする。

中近東に
おけるナチの
プロパガンダの
全貌を
明らかにする。



100th
岩波書店

定価(本体6800円+税)

目次

解題 ナチズム研究の新たな局面 星乃治彦…………… 1

はじめに…………… 12

第1章 序論…………… 17

第2章 反セム主義の定義 一九三〇—一九三九年…………… 31

第3章 増大する接触、最初の放送 一九三九—一九四二年…………… 53

第4章 一九四二年の北アフリカと中東におけるプロパガンダと戦争…………… 76

第5章 「ユダヤ人に殺される前にやつらを殺せ」
一九四二年の北アフリカ戦線におけるプロパガンダ…………… 111

解題 ナチズム研究の新たな局面 星乃治彦

ナチスとアラブの接点

本書は Jeffrey Herl, *Nazi Propaganda for the Arab World*. New Haven, Conn.: Yale University Press 2009 の全訳である。一読してわかることだが、この本は、単純にアラブ・ナチスといっているかのような勘違いを生み出しやすい。むしろ、そうした予断自身に問題はないのか、というのが、「歴史家は挑発者でなければならぬ」(2001. "The Historian as Provocateur: George Mosse's Accomplishment and Legacy." *Yad Vashem Studies*, vol. 29, 7-26) と主張する著者ハーフによる一つの問題提起でもある。

たしかに、ニコニコアラブ・ナチスと映ること自体が、日本でもユダヤ人、正確に言えば一部のシオニストの語り方が優勢に推移している証拠でもある。ヨーロッパでの反ユダヤ主義と中東地域におけるそれは、明らかにコンテクストが違い、それを無視することの暴力性にもう少し自覚的であっても良いのかもしれない。ヨーロッパにおけるユダヤ人差別の歴史は長い、その歴史を叙述することは、前近代も含めて相当な蓄積を積んでいる。これらの成果は、歴史的事実であるし、単なる「物語」とはいえない。特に、ドイツ史の中で最大の関心事であるアウシュヴィッツでのユダヤ人虐殺に関しては、『アンネの日記』から始まり連綿と続く膨大な蓄積がある。ヨーロッパにおけるユダヤ人の悲劇はまさに筆舌に尽くしがたい歴史的事実であり、アドルノをして「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」と言わしめ、否定されるはずもない。

ただ、そこから一部のシオニストは、アウシュヴィッツを、イスラエル国家建設を正当化する論拠へと誘導する。そればかりか、さらに遡って古代のディアスポラから始め、アウシュヴィッツ、さらには戦後のパレスチナ「帰還」さえ叶わないという物語を、「国家をもたない民」の悲劇として描き出す。民族や宗教、国民国家の成立など、錯綜する問題を抱えたユダヤ人差別が、いとも簡単にイスラエルの建国によって解決するかのような「語り」へと変容させられる。こうした語り方の中で、強制収容所にはユダヤ人以外にも多くの少数者たちがいたという事実か

解題 ナチズム研究の新たな局面 星乃治彦

ナチスとアラブの接点

本書は Jeffrey Herf, *Nazi Propaganda for the Arab World*, New Haven, Conn.: Yale University Press 2009 の全訳である。一読してわかることだが、この本は、単純にアラブ・ナチスといっているかのような勘違いを生み出しやすい。むしろ、そうした予断自身に問題はないのか、というのが、「歴史家は挑発者でなければならぬ」(2001, "The Historian as Provocateur: George Mosser's Accomplishment and Legacy," *Yad Vashem Studies*, vol. 29: 7-26)と主張する著者ハーフによる一つの問題提起でもある。

たしかに、ここでアラブ・ナチスと映ること自体が、日本でもユダヤ人、正確に言えば一部のシオニストの語り方が優勢に推移している証拠でもある。ヨーロッパでの反ユダヤ主義と中東地域におけるそれは、明らかにコンテクストが違い、それを無視することの暴力性にもう少し自覚的であっても良いのかもしれない。ヨーロッパにおけるユダヤ人差別の歴史は長いし、その歴史を叙述することは、前近代も含めて相当な蓄積を積んでいる。これらの成果は、歴史的事実であるし、単なる「物語」とはいえない。特に、ドイツ史の中で最大の関心事であるアウシュヴィッツでのユダヤ人虐殺に関しては、『アンネの日記』から始まり連綿と続く膨大な蓄積がある。ヨーロッパにおけるユダヤ人の悲劇はまさに筆舌に尽くしがたい歴史的事実であり、アドルフをして「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」と言わしめ、否定されるはずもない。

ただ、そこから一部のシオニストは、アウシュヴィッツを、イスラエル国家建設を正当化する論拠へと誘導するそればかりか、さらに遡って古代のディアスポラから始め、アウシュヴィッツ、さらには戦後のパレスチナ「帰還」さえ叶わないという物語を、「国家をもたない民」の悲劇として描き出す。民族や宗教、国民国家の成立など、錯綜する問題を抱えたユダヤ人差別が、いとも簡単にイスラエルの建国によって解決するかのような「語り」へと変容させられる。こうした語り方の中で、強制収容所にはユダヤ人以外にも多くの少数者たちがいたという事実か

ら離陸し、収容所がユダヤ人を殺害するためだけのものであるかのようになっている。そしてこの物語は、『十戒』だったり、『シンドラーのリスト』などといった日常的なメディアによって補強され、欧米の世論に大きな影響力を持つてきただろうし、それによってイスラエルは国際的な認知を固めてきた。

こうしたユダヤ人言説が圧倒的な中で、アラブ人ないし、イスラームはどこに在るのだろうか。ヨーロッパ地域でマイノリティであったユダヤ人は、少なくとも中東地域においては違った顔を持つ。アウシュヴィッツによって正当化されたイスラエル国家によって苦しめられるアラブ人たちは、自分たちを語る機会を奪われているし、彼らを語る歴史はおそろしく少ない。こうして民族の「語り」は非対称に推移する。「アラブの絶望」はこうしたところにも起因する。ただ、アラブ側に寄り添って歴史を見返そうとすると、「アウシュヴィッツはなかった」と強弁する歴史修正主義者が辿ったような陥穽にはまり込んでしまふ危険性も意識しなければならぬ。二〇世紀最大の悲劇であるアウシュヴィッツという「過去」と、「九・一一」に代表される「現在」を結び付けようという試みはそれほど簡単ではない。

ナチスの中東との関連に関してまとまった考察は、一九六五年に出された東ドイツの歴史家ティルマンの『第二次世界大戦におけるドイツのアラブ政策』(Heinz Tilmann 1965, *Deutschlands Araberpolitik im Zweiten Weltkrieg*, Berlin-Ost: VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften)に始まり、その後アラブ人たちのナチスへの期待感に言及した一九六六年のヒルツォヴィツ『第三帝国とアラブ東部』(Lukasz Hirszowicz 1966, *The Third Reich and the Arab East*, London: Routledge & K. Paul)と続いた。こうしたナチスとアラブの関係への注目は本書でも伏線となっている。

第一次世界大戦が終わると、イギリスがユダヤ人国家建設を容認したバルフォア宣言を下敷きにしながら、イギリスの委任統治の下、パレスチナにはユダヤ人の人植が急速に進んだ。一九二二年にはパレスチナ人口の一一％にあたる八万三七〇〇人だったユダヤ人は、一九四五年には三〇％、五五万三六〇〇人に達する一方、同じ時期アラブ人の比率は七八％から六〇％に減じた。こうしたユダヤ人の急速な増大は、一部のアラブ人の激昂をかつた。一九二〇年には四人のユダヤ人殺害事件が起こったし、その後一九二一年の四三人ユダヤ人虐殺事件へと続き、一九二九年には嘆きの壁事件、ヘブロン事件、ツファット事件と両者の対立は頻発するようになり、ついには一九三六年の「アラブの大蜂起」につながるようになった。こうした背景を知ると、極端な反セム主義を主張していたナチスがアラブ人の関心を惹いたとしても何ら不思議ではない。そればかりかナチスは、英仏植民地主義、ユ

ダヤ人、ポリシェヴィキという、二〇世紀を通じたアラブ人にとっての三つの敵に対する、最も先鋭的な敵対者と映った。こうしたナチスに対するアラブ人の共感、時期によって濃淡はあるものの、戦後も一貫して流れ現在に至っている。その意味では、ナチスによって三つの敵が形成されたともいえよう。

このうち英仏植民地主義への「ジハード(聖戦)」は何も第二次世界大戦に限らず第一次世界大戦においてもドイツによって中東地域で展開された宣伝であった。反ポリシェヴィキは、通奏低音として二〇世紀中東を通して流れるものであるのに対して、強烈な反ユダヤ主義はナチスに特有な現象で、特に戦後、イスラエルの建国とその後のシオニストたちの横暴が展開され、これに対して欧米社会が反ユダヤ主義をタブーとして有効な反論を用意できないとすれば、いきおい反ユダヤ主義をナチスに求めることにもなる。

特に一九四一年、第二次世界大戦の戦線が北アフリカにまで拡大すると、それまで間接的だったナチスとアラブの関係は、一気に直接的で現実的なものとなった。「砂漠の狐」ロンメルが一九四二年六月にトブルクを陥落させ絶頂期を迎えるのと並行して、チュニジアではユダヤ人の迫害が始まっていた。そしてエジプト方面にドイツ軍がさらに進撃すると、パレスチナのユダヤ人は、第二次エル・アラメインの戦いでドイツが惨敗するまで「不安の二〇〇日」を過ごすこととなり、ユダヤ人の武装勢力ハガナーはドイツ軍侵攻に備えて常備軍パルマツハを結成している。イスラエルの歴史家フライリングはこの時期ドイツ軍がパレスチナにまで侵攻してくるのではないかというユダヤ人たちの恐怖感に注目する。

他方、中東から見て北方でもナチスの快進撃が続いていた。一九四一年六月二二日、第二次世界大戦の帰趨を決した独ソ戦が始まると前後して、一九四一年四月のイラクではキラーニーの親枢軸クーデターが起こったし、同じ四一年一月ドイツ軍が中東の北側からの入り口にあたるコーカサス地方で戦闘に入ったという事実は、「アラブの解放の時が来た」という確信をアラブ世界に与えた。さらには、このことが、この時期「ヨーロッパにおけるユダヤ人問題の最終的解決」(「ホロコーストに関する重大な決定が下されるに当たって、大きな役割を果たした。二〇〇六年のマルマンとキュッパースの『三日月と鉤十字』第三帝国、アラブ、パレスチナ」(Klaus-Michael Mallmann / Martin Cüppers 2006, *Halbmond und Hakenkreuz: Das Dritte Reich, die Araber und Palästina*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft)は、)こうした点を従来の外交文書だけではなく、軍事文書、親衛隊文書を渉猟して、ホロコーストがヨーロッパから中東へと展開されていく可能性を論じている。

ドイツ・ユダヤ人・アラブ人は幾重にも重なる複雑な関係で結ばれているが、ナチスとアラブ人との共闘関係を象徴的に表している焦点として浮上してくるのは、何と云っても、本書の主役でもあるハーロッド・アミン・アル・フサイニー（一八九五年―一九七四年）である。彼に關しては、ここでままとまった紹介が必要であろう。

フサイニーは、戦前にエルサレム大ムフテイー（イスラームの宗教指導者）、最高ムスリム評議会議長を務めた、パレスチナを中心とするアラブ側の指導者であり、戦後も全パレスチナ政府（PLI）大統領、パレスチナ民族評議会議長ともなった人物である。彼は、第一次世界大戦中はオスマン帝国軍に入隊し、戦後は、大シリア主義構想の熱烈な支持者となり、現在のシリアの地に建国された大シリアの王ファイサル一世の傍で活躍した。サイクス・ピコ協定により中東が英仏の委任統治下に置かれると、フサイニーは「英国委任統治領パレスチナ」政府のアラブ人顧問官の職に就き、一九二二年エルサレム・ムフテイーの選挙に際してはイギリスからの協力を得るなど、反英の姿勢には一貫性は感じられない。その後一九二三年最高ムスリム評議会議長を名乗り、一九三三年、兄であるカーミル・フサイニーの後を継ぐ形でエルサレム大ムフテイーに就任した。

宗教的権威を獲得する一方で、一九一九年頃からは、汎アラブ主義運動を展開するようになり、「大アラブ構想」を練り、アラビア語新聞に数多く寄稿するようになっていた。ただ、フサイニーは、それだけにとどまらず、一九二〇年、イスラーム教の祝日ネビ・ムーサ祭に、エルサレム旧市街のユダヤ教徒を襲撃させ、四人を殺害しダマスカスに逃亡するなど、ユダヤ人に対するテロリズムによって自らのアイデンティティを確認するようになっていた。その後もこうしたユダヤ人に対する強硬な姿勢は変わらず、一九二二年ユダヤ人虐殺事件、一九二九年の嘆きの壁事件、ヘブロン事件、ツファット事件、一九三六年、ヤーファアにおける九人のユダヤ人虐殺などを次々に引き起こした。そしてついには一九三六年のいわゆる「アラブの大蜂起」を指揮したため、英当局により、ペイルストへと追放されることとなった。

フサイニーの攻撃の矛先はユダヤ人だけにとどまらなかった。パレスチナ・アラブ人の大部分はユダヤ人との平和な生活を望んでいたにもかかわらず、彼は、ユダヤ人との共存を模索していた反フサイニー派のアラブ人をも殺害し、ヘブロン市長、エルサレム元市長を含むフサイニー家のライバルのアラブ人一三六人を虐殺した。一九四一年には、イラクでのラシード・アーリー・アル・キラーニー（一八九二年―一九六五年）が枢軸国の支援を得て反英クーデターを起こすと、彼もこれを現地でも支援するが、結局これが失敗に終わると、イランに亡命した。その後英ソ両軍がイランに侵攻すると、今度はナチス・ドイツに亡命した。一九四一年一月二九日にはヒトラーとも会見し、ヨーロッパからユダヤ人を「殲滅」するよう要求した。ヒトラーからは、中東・北アフリカにおけるユダヤ人一掃とアラブ民族主義勢力に対する支援の確約を得た。そして本書で扱われているように、ベルリンからパレスチナに向けての反ユダヤ主義宣伝放送を続けた。

一九四五年ドイツが敗戦すると、フサイニーはイギリス軍に捕らえられたものの、翌年脱獄してカイロに赴いた。そこでしばらく潜伏していたが、一九四八年の第一次中東戦争にアラブ諸国が敗北すると、久しぶりに目の目を見ることとなり、ガザに設置された全パレスチナ政府の大統領となった。強烈な反ユダヤ主義の持ち主である彼がここで復権すること自体がアラブの状況を表しているが、この全パレスチナ政府は四ヶ月で崩壊し、フサイニーはその後レバノンを中心に活動し、一九五九年以降はペイルストに隠棲するようになった。ドイツ・ユダヤ人・アラブ人の関係を戦後もつなぐ人物でもあった。本書によれば、戦後のフサイニーを支えたのは、戦争中にナチス宣伝に感化された中間層以上のアラブ人の指導者層ということになる。その層が現在に至るまで、アラブ世界をリードしているということになるのである。その意味では、フサイニーがナチスを受容するプロセスは、それから綿々と九・一一へと続く系譜に接合する。

たしかに、当初からナチスとアラブ指導者たちの間に矛盾がなかったわけでもない。本書でも触れられているが、ヨーロッパ的、ドイツ的、キリスト教的なものをあれほど強調したナチスとアラブ人をつなごうとするとき、アラブ人と「アーリア」との関連はいまいにされたし、反ユダヤ主義によってユダヤ人がヨーロッパから追放され、パレスチナに渡ってくると、ユダヤ人とアラブ人との間での矛盾が激化するという帰結は無視された。こうした矛盾は、ヒトラーの『わが闘争』がアラビア語に翻訳されたものの、刊行されなかった一因になっている。

だが、本書でも言及されているように、こうした矛盾は、プロパガンダの世界では、覆い隠されたし、またコーランと近代的反ユダヤ主義の共鳴といった工夫によって、ユダヤ人は、「イスラームの敵」に作り上げられていった。その一方で、アラブの解放についてイギリスが約束を守らなかったことを指摘するなど、三つの敵を糾弾する

とともに、コーランの朗読、ナシヨナリストの詩の朗読、民族音楽を流し、アラブ人としてのアイデンティティの自覚を促したのであった。

ナチスという「過去」を「現在」を結びつける視点

著者のジェフリー・ハーフは一九四七年生まれで、日本で言えば「団塊の世代」に当たる。歴史学を主専攻、社会学を副専攻としてウィスコンシン・マディソン大学を六九年に卒業し、修士課程はニューヨーク州立大学歴史学部在籍し、その後マサチューセッツ州にあるブランダイス大学社会学部で、八〇年に博士論文 *Reactionary Modernism: Reconciliations of Technics and Unreason in Weimar Germany and the Third Reich* を提出し、博士号を取得している。ハーヴァード大学やオハイオ大学等で教鞭をとった後、現在メリーランド大学教授の任にある。専攻はドイツを中心とした二〇世紀ヨーロッパにおける精神史、文化史であり、彼の著作や彼に関する文献は、ドイツ国立図書館のカタログに詳しく ([https://portal.dhbde/opac.htm?method=simpleSearch&query=\[JEFFREY+HERF.二〇一三年七月五日閲覧。下同様。](https://portal.dhbde/opac.htm?method=simpleSearch&query=[JEFFREY+HERF.二〇一三年七月五日閲覧。下同様。))

最初に注目されたハーフの著作は、博士論文を下敷きとし一九八四年に出された『反動的モダニズム』(1984. *Reactionary Modernism: Technology, Culture, and Politics in Weimar and the Third Reich*, New York: Cambridge University Press)であるが、その中でハーフは、一見矛盾する「反動的モダニズム」という概念を使って、ドイツにおける確固たるモダニティや進歩に対する肯定的スタンスが過去の、特に技術的ロマン主義の夢と結びついている点を描き出した。こうした潮流はヴァイマル共和国の「保守革命」思想家たちの思考の中に脈々と流れ、ひいてはナチ党やナチ体制の中まで行き着くというのである。この著作は、日本でも一九九一年に『保守革命とモダニズム』ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治(中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳、岩波書店)として邦訳され、また二〇一〇年に『岩波モダンクラシックス』の一冊として再刊されている。

その後二〇〇一年九月一日を経て、ハーフの関心は、本書に集結するテーマに向かった。彼はイスラームとナチスの関係を歴史的に論じるということで、「歴史的イスラーム・ファシズム」(Historischer Islamfaschismus)論者とも言われている (http://de.wikipedia.org/wiki/Jeffrey_Herf)。二〇一〇年五月にテルアビブで開催された「ファシズムと民族社会主義に対するアラブ側の反応」という会議を踏まえた、週刊誌『ジヤングル・ワールド』二〇一〇年二八号掲載のインタビュ記事において、彼はこれまで歴史研究者が一九二〇年代以降のイスラームの反セム主義を研究の対象とせず、解明しようとしなかったことを問題にしている。フサイニーのような非常に重要なパレスチナのイスラーム指導者たちは、ドイツのナチ体制と熱狂的に協同したが、そこで確認されるユダヤ人に対する憎悪を媒介として、ナチスとイスラームという二つの反セム主義が融合したという事実には、歴史家は向き合っていなかった、とハーフは主張する。

「エドワード・サイードの主張や第三世界に共鳴する歴史家にとって、ヨーロッパに発したグローバルに展開する反セム主義の重点がアラブ世界とイランに移動してきていることに考えが至ることは難しいかもしれない。……誰もすべてのアラブ人やムスリムがヒトラーを褒め称えたことを今は言わないが、当時はそうしていたのである。イスラームやアラブ民族主義者たちとナチス・ドイツが協力関係にあったという事実や、特にコーランの特別な解釈によって根拠づけられた反セム主義が、民族社会主義やアラブ・ムスリムの急進主義者たちを支えるのに一役買っていたという事実は、否定しようがない。……イスラエル建国のはるか以前の話である。……こうしたことが、ドイツ側から流される短波放送のプロパガンダが、なぜ『わが闘争』ではなくコーランを引用したかの理由である。一九八八年のハマース憲章やアル・カーイダの宣言、イラン大統領の長演説を読む者が誰であれ知っているのは、そこで言われていることで新しいことは何一つないことである。彼らの主張やスローガンの基となっているのは、第二次世界大戦中、特に一九四一年から四五年にかけて、ベルリンで展開されたナチスとイスラームとの協同の時代に生み出されたものである」(Karl Pfeifer 2010. "Jeffrey Herf im Gespräch über islamistische Formen des Antisemitismus." *Jungle World*, Nr. 28, 15. Juli 2010. <http://jungle-world.com/artikel/2010/28/41336.html>)。

たしかに、ナチスとイスラームの関係の考察は従来欠落していた視角であろう。ただ、ナチスとアラブの関係は果たしてそうとらえるべきだろうかという疑問がその後提出された。ハーフに対するまとまった批判を、ニューヨーク州立大学で政治学・歴史学を教え、ハーフと研究領域が接近しているリチャード・ウォーリンが、二〇〇九年一月二二日付『高等教育クロニクル』に「ハーフによる歴史の誤用」と題する本書の書評の中で展開している (Richard W. W. 2009. "Herf's Misuses of History." *The Chronicle of Higher Education*, November 22. <http://chronicle.com/article/Herf's-Misuse-of-History/49195/>)。

ウォーリンに言わせれば、本書で最後に登場するエジプトの指導者ナセルは、ナチの後継者というよりもむしろスターリン主義者だったし、オサマ・ビン・ラディンやアル・カイダ登場は、この地域の具体的な事件から説明すべきであって、ナチスという「過去」に、それもナチスの思想や宣伝から説明がつくものではない、とする。むしろその意味では、「イスラーム原理主義」と呼ばれる改革運動の走りとしてされるワッハブ派の影響の方がはるかに大きかったのではないかと、という批判を展開している。

こうした論争を意識しながら、その後二〇一二年にカーミルは、丹念に戦後のディスカールを追跡している(Omar Kamil 2012. *Der Holocaust im arabischen Gedächtnis: Eine Diskursgeschichte 1945-1967*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht)。またキーファーによるカーミルの書評でも、本書は真つ先に言及されている(Michael Kiefer 2012. "Rezension zu: Kamil, Omar: Der Holocaust im arabischen Gedächtnis. Eine Diskursgeschichte 1945-1967." Göttingen, in: H-Soz-u-Kult, 13032013. <http://hsozkult.geschichte.hu-berlin.de/rezensionen/2013-1-169>)。その意味で本書は「ナチスといういわば「過去」と、中東という「現在」を結びつける視点をどこにおくべきかという議論において、火付け役になった感がある。

特に本書でハーフが短波放送というプロパガンダ方法に着目していること自体が斬新である。一九三一年で二〇%程度の低い識字率だったアラブ世界では、印刷物によるナチ・プロパガンダよりも、一九四二年段階でエジプトに六万台、イラクに一万台、シリアに二万台普及した短波ラジオ受信機を通じて、カフエなどが集まる場所で日夜繰り返されるナチ・プロパガンダの方がはるかに効果的であっただろう。「反動的モダニズム」に関心を集中させるハーフにとっては、恰好の研究対象とも言えよう。フサイニーの思想を分析すれば、彼自身が反動的モダニストと言えなくもない。たしかにナチスの宣伝に関しては、その効果が絶大だったとして一般に関心が高いものの、その分析方法は簡単ではなく、論証も難しいが、ここで一九七七年にメリーランド州にあるアメリカ合衆国国立公文書館に所蔵されていた在カイロ・アメリカ大使館に関する國務省文書の機密指定が解除されていたことは、ハーフにとっては天の救いだったのかもしれない。

ナチスのアラビア語による宣伝資料の録音はほとんど残されていないが、エジプトでアメリカの首席公使や大使を務めていたカークの指前で、カイロでは一九四二年三月二十九日から一九四四年三月二十九日まで録音され、それが英語に翻訳され、特に一九四二年九月十三日以降はワシントンのハル國務長官に要約が送られていた。ハーフは、

こうして発せられた急進的反セム主義の内容をフォローするという送り手を問題にする一方で、ナチ・プロパガンダを乗せた短波放送が具体的にどのような影響力をアラブ世界で持っていたかを、アメリカ戦略事務局やアメリカ軍の戦時情報局のアメリカ人や、イギリスの諜報部長からもたらされる連合国諜報報告書によってフォローしようとしている。つまり「受け手」を問題にしているのである。ただ、ここではアラビア語やペルシア語の史料は使われていないことは、今後の課題とされている。

ハーフの主張の特徴は、「文明の衝突」ではなく、「精神的一致」であって、フサイニーに代表されている。英仏植民地主義ないしはユダヤ人を介在させながら奇妙な結合を説く。そしてその結合は現在にも続いている。結局は二〇〇一年九月一日に連なる水脈となっている。こうした考察から明らかになるのは、それがアラブ人の思想の中に、どういった形で理解され、はめ込まれていったのかというコンテキストの問題であって、それは、単に「敵の敵は味方」という図式では収まらない内容なのかもしれない。そこにおいて、ユダヤ人と英仏植民地主義(後のアメリカ「帝国主義」・ボリシェヴィズムといった三者を敵とするナチスが、アラブ人にとっては魅力的に見えたとしても不思議ではない。

たしかに一九四五年はヨーロッパではナチス・ドイツからの解放と理解されるものの、中東では、その後イスラエル建国、シオニストの傍若無人に続き、「アラブの絶望」は解決するどころか事態は悪化するばかりである。アラブ世界の実態や歴史が少しずつではありながら明らかになるにつれて、換言すればアラブ社会の視点が意識されればされるだけ、ユダヤ人の「語り」に重きを置きアラブ人の「語り」を軽視してきたという従来の不均等は自覚されるようになる。新しいパラダイムに必要なのは、「アウシュヴィッツの嘘」に代わるアラブ側にも配慮した視角である。私たちはその新しい視角を求めてハーフに注目した。ただ、ハーフが本書で記したのも、従来の見方から一歩出ているに過ぎない。批判も予想できよう。限界も確認できる。ここではそれらをあえて論じることなく、これからの議論を待ちたい。一つだけ確実なのは、この問題を論じれば論じるだけ、ユダヤ・アラブ関係の複雑性を改めて認識せざるを得ないことである。この複雑性を承知するならば、従来「傀儡」「裏切り者」「踊らされた」という評価に甘んじてきた人物の分析を必要とする。その中では、インドにおけるチャンドラ・ボースの高い評価やインドネシアのスカルの英雄視を解く鍵ともなる。

本書を読みながら、痛感させられるのは、今更ながらいかにナチズムが現代世界に暗く長い影を投じているか

ある。実際に現在でも、二〇〇八年二月二九日、イスラエルのヴィルナイ国防副大臣は、ハマースのロケット弾攻撃に対して、さらに事態が悪化すれば、「パレスチナ人は自分たちに大規模なシヨア(ホロコーストを意味するヘブライ語を招くだろう」と、ナチスがユダヤ人に対して行った行為をアラブ人に対して差し向けることは許容されるかのように平然と発言した。そこには、アウシュヴィッツが暴力に依存して問題を解決しようとする人類に対する警告であるという、人類史的・根本的反省は全く見られない。

これに対抗しようとするときハーフも注目するのが、アラブ側に見え隠れするナチスの宣伝効果の残影である。記憶に新しいところでは、二〇〇五年二月イランのアフマディネジャド大統領は、ホロコーストがイスラエルを正当化するための「おとぎ話」であると述べ、「ホロコーストはなかった」と発言し、二〇〇六年二月にはテヘランでホロコースト懐疑派がホロコースト・グローバルヴィジョン検討国際会議を開いた。ハマースの政治指導者ハレード・マシャールも「イスラームはイランを支持するだろう。なぜなら、イランがイスラームの想い、とくにパレスチナの想いを言葉にしてくれるからだ」と述べた(Al Jazeera, "Hamas springs to Iran's defence": <http://www.aljazeera.com/%20archive/2005/12/2008410111928749358.html>)。

日本でもアラブに親近感を抱く政治的には左派系が「アウシュヴィッツの嘘」に感染する場合も多い(「アウシュヴィッツの嘘」に関しては、ティール・バステイアン著、石田勇治・星乃治彦・芝野由和訳「アウシュヴィッツと「アウシュヴィッツの嘘」」白水社、一九九五年を参照)。たしかに、ハイファ大学の調査によると、二〇〇九年現在、ホロコーストは実在しなかったと信じているアラブ系イスラエル人は四〇・五%と、二〇〇六年調査の二八%を大幅に上回った(「世界日報」二〇〇九年五月八日)。「アウシュヴィッツの嘘」がこれだけアラブ世界で広がっているのは最近の現象だとしても、それだけ「アラブの絶望」は深刻という一つの証左なのだろう。

翻訳について

翻訳の担当は、一応、「はじめに」・星乃、第1章・第4章・熊野、第5章・北村、第6章・今井、第7章、第8章、結論・星乃、としたが、用語の統一、索引の整理など骨の折れる作業は北村・今井両氏の奮闘の賜物であるし、全体的な綿密なチェックにあたっては、特に熊野氏、その他にも、福岡大学ポストドクターの池上大祐氏、山田雄

三氏が奮闘してくれた。労を多としたい。

訳者たちに共通するのは九州を生活の場にするか、ないしはしていたか、である。ハーフのように、いわば「半周縁」から歴史像を問い返すという逆転の発想には九州は適地なのかもしれない。解題をお願いした中東問題の専門家である臼杵氏も九州人である。氏には、多忙の中にもかかわらず、特に訳者たちにとって不慣れなアラビア語などの訳語の問題に助言をいただいたばかりか、全体の翻訳にもこまめに目を通していただいた。改めてお礼を申し上げます。

岩波書店編集部の中永泰造氏には、ハーフの翻訳のご提案をしていただき、私どもにも翻訳のチャンスを与えていただいたばかりか、編集作業に根気強く付き合っていた。心より感謝したい。

「ナチズムのアラビア語」プロバガンダの衝撃、受容、波及効果を総括的に検討することは、この本だけでは難しい。戦後現在に至るまで、反帝国主義の情熱が優勢であったために、ヨーロッパ起源のファシストやナチのイデオロギーが中東地域でいかに流布していたのかという問題関心は生まれなかった。中東においてナチズムとファシズムが流布していたこと、この思想が戦後アラブの世俗的・宗教的急進主義に受け入れられていく系譜を解明することは、アラブやイスラームの専門研究者にとって今後の重要な課題である。この本がそうした研究や著作活動の前進にとって貢献できればと期待するばかりである」という本書の結論も、私たちの期待と同じものである。